

第126号

副会長挨拶
三教研に望むこと
支部トピックス（西尾支部・みよし支部）
学校自慢（蒲郡支部・新城支部）
教室の窓から（岡崎支部）
私のコレクション（高浜支部）
調査委員会報告
授業力養成講座
研究大会の報告
教育随想



「学び続ける教師」

三河教育研究会 副会長
佐藤 淑 乃



朝、K先生の教室の机上に子どもからの手紙がありました。「K先生は祭りについてくわしく調べたり、祭りのプリントをコピーしたり、とてもがんばってます。毎日学校へ来て、あせをかいながら先生を見ると感動してしまいます。(中略) これからもみんなと先生で勉強がんばりたいです」

三年生のK先生は、地域の祭りを総合的な学習の時間で取り上げ、祭りの準備の様子や子どものお囃子や獅子舞の練習を見学するなど教材研究に没頭していました。

本校は、市教育委員会より「こころの教育」の研究を委嘱され、十月に研究発表を行いました。自分の授業を冷静に分析したり、自分の学級経営を見つめ直したりできるよい機会であり、教師の力量向上こそが子ども一人一人を大切にすることにつながるのだと捉え、実践を積み重ねてきました。

齋藤孝氏は、著書「教育力」の冒頭で、「教育の根底にあるのは、あこがれの伝

染である」と書いています。教える教師が、教材に憧れをもち、心のエネルギーを注ぎ込むことこそ、子どもたちの学ぶ意欲に火をつけます。三年生の子どもたちが地域の祭りについて自分事として意欲的に追究し、自分の考えを深めることができたことは言うまでもありません。

学校全体の研究授業を行い、自分たちの研究の手だての検証を率先して行う研究主任の姿。教科部会や学年部会で、発問や支援の具体的な方策、ノートへの朱書きの仕方、考えを深めるための構造的な板書などを熱く語る先輩教師の姿勢。そうしたものが若手教師に広がっていました。学習の足跡が背面全体に掲示してあったり、国語の物語の世界に浸ることのできる環境にしてあったりする教室の中で、子どもたちは安心して学び、その意欲は継続しました。

学び続ける教師と共に、子どもたちは、協力して問題を解決したり、多様な考えを認め合ったり、自分自身を見つめ直したりすることもできました。

今、私たち教師には、時代の要請にこたえるべく、実に多くの資質能力が求められています。しかし、まずすべきことは、目の前にいる一人一人の子どもの姿を見つめ大切にする、そして学ぶ姿勢をもち続けることです。子どもの半歩先を子どもと共に歩む教師を目指していきたいと思えます。



“ひと手間”のすすめ

三河教育研究会 副会長
浅井 英 雄



どの分野でも「達人」とか「匠(たくみ)」と呼ばれる人がいます。長年の経験とそれに裏打ちされた技を駆使する方です。

その道一筋に生きてきた人の全てが達人や匠になれるかというとそうでもありません。当然のことながら、繰り返し繰り返して日々を漫然と過ごしているのでは、達人や匠の域に達することには到底できるはずありません。

凡人で過ぎてしまふのか、それとも達人や匠の域に近づいていくのか。その境界線は「ひと手間かける」ことにあると私は思います。工芸品にしろ料理にしろ、「ひと手間」をかけて作り上げた作品は、完成だけを目的にしたそれと比べ、ひと味もふた味も違う仕上がりになるものです。

教育の営みも共通したところがあるように思えてなりません。「決められたことを決められたとおりに」こなしているだけでは、目の前の「この子」にとってだけでなく、教師自身の成長という観点からもマイナスです。大きな労力をかける必要はありません。「ひと手間」でよ

いのです。その積み重ねが「この子」を更に輝かせ、自らの力量向上につながっていくと思うのです。

教育の成果はすぐに見える形として表れるものではありません。数値で評価できないところが数多くあるのもまた教育です。「一人だけでも思いが通じれば」「いつか自分の思いが伝わる時がくる」と信じて日々取り組むしかないように思います。

尊敬する先輩から、かつてこんな話をしていたことがあります。

自らの成長は、自覚できないことが多いものです。ただ、「ひと手間」かけることをいとわず、「この子」のために愚直に取り組めば、知らず知らずのうちに教師としての力がついていくものです。

働き方改革の名のもと、「学校はブラック」「ブラック部活動」などと報道されることが多くなりました。働き方改革は避けては通れない道だとは思いますが、私たちが日々対峙している「この子」の健やかな成長にとってプラスに作用する「ひと手間」を省略してはならないと思えます。

その「ひと手間」かける時間をどのように捻出するのか。答えは簡単には見つけられそうにありません。ただこれだけは言えそうな気がします。「充実感や多忙感を凌駕する」。そう思える教師でありたいものです。

三教研に望むこと

「子どもありき」の 教育を引き継ぐ

幸田町立豊坂小学校

本多 宣子

昨秋、附属岡崎小学校研究発表会にて、愛知教育大学教職大学院教授倉本哲男先生のご講演「附属岡崎小（三河）の伝統的実践とは？」を拝聴し、初任以来大切にしてきた「子どもありき」の教育の重要性を再認識しました。

ご講演において、子どもの切実な問題解決を核とする学習を構想し、「座席表・カルテ」にて個の思いをとらえ、「教師の出・授業記録分析」をする「子どもありきの教育論」こそ「三河の教育文化」というお言葉が心に留まりました。この教育文化が今に引き継がれているのは、「三河のすべての子どもたちに、三河の教師らによる優れた教育を保証したい」という三教研発足当時の先人の熱き思いが受け継がれ、時代のニーズに合わせ発展させられたご尽力の賜と考えます。

振り返ると、初任当時、私は「子ども

三教研「かえる」の力

豊橋市立東田小学校

山川 裕見子

の思いをとらえ、子どもの意識がつながる単元構想」を学ぶため、毎年夏季研修に参加しました。中堅では、家庭科専門班委員として各地区の先生方と研究推進に携わりました。さらに、他教科でも提案の機会を得て、単元を通してご指導を受けることができました。こうした会に参加する度に、講師や他地区の先生方から大きな刺激を受け、子どもたちをより成長させたいという思いを強くもちました。

今、新学習指導要領に向けた授業改善と働き方改革などの課題が山積しています。指導案もネット上で容易に入手できる環境となりましたが、目の前の子どもをとらえた検討を十分できずに授業実践をせざるを得ない状況が懸念されます。

いつの時代においても「教育は人なり」です。新元号を迎える今こそ、五十八年間受け継いできた「子どもありき」の教育を確実に引き継ぐために、三河各地の教員が学び合い、つながることが大切と感じます。三教研で、各地で着実に積み上げられている研究の成果を広める効果的なつながりを模索し、三河の教育の質がさらに高められることを願います。

目の前の生徒一人一人を大切に

碧南市立南中学校

縦山 真司

「三教研」は、最も身近な学校応援団です。このように感じられたのは、三教研の部会推薦により、文化振興会の刊行物編集に携わる機会を得てからです。刊行物が学校現場に届くまでの流れを知りました。市販の問題集等との違いは「作成者は我々の仲間」「使ってみて修正ができる」の二点です。

三河各地の仲間が内容を検討し、作成した刊行物に対して、現場の直の声が編集委員に「返る」ことは、より使いやすい教材に「変える」ことにつながります。

市販の問題集と比べて、振興会の刊行物を選んでみても、作成は学習指導要領に沿っており、学習内容を別の内容に「替える」わけではありません。ましてや役割を「代える」わけでもなく、同等の教材として「換える」だけです。何より、値段的にもやさしく「買える」教材の点から考えても負担は小さくなります。

刊行物の作成の流れは、まさに現場にとっても授業内容の向上に「還り」、刊行物の有効活用は、学校現場の応援に「帰って」きてくれます。

この「かえる」尽くしのサイクルは、今後とも大切にしていきたい「力」です。

近年、中学校において不登校生徒の占める割合が、増加傾向にあります。本校も例外ではありません。しかし、養護教諭、管理職、そして外部機関とも連携して、生徒や保護者の思いに寄り添い、かわり続けることで、少しずつ変化が見られます。抱える問題を自分で解決しようとする姿が見られるようになってきました。一人一人を大切に温かいかわりが、実を結んでいることを感じます。

一方で、授業場面の生徒に目を向けると、落ち着いた態度で取り組む姿はあるものの、課題を自分事と捉え、主体的に解決するには至っていないと感じます。そうした生徒の実態から目を背けず、先の例と同じように、いかに授業の中で目の前の生徒一人一人を育てることができると考え、努力しなくてはなりません。

三河教育研究会は、たくさんの方の先生方の実践を基に学び合うことのできる組織です。子どもたちのために、この組織をうまく活用し授業力を高める必要があります。そのためにも、三河教育研究会の発展に期待するだけでなく、私たち会員が研究の成果を共有して研鑽を重ねていくことが求められているのだと思います。

西尾支部

新しい学校から

新たな時代の創造を

西尾市立佐久島中学校

本市には、全校生徒十人に満たない離島の学校から生徒千人を超える都市部の学校まで、三十六の小・中学校があります。県内で最も小さな中学校は、三河湾に浮かぶ佐久島にある佐久島中学校で、小学校と施設を共有しています。

佐久島は、自然に満ち、歴史や伝統にも特色のある地域です。最近では、「癒しとアート」をキーワードとして、新聞や雑誌、テレビ等のメディアにも度々取



佐久島小・中学校の校舎

り上げられ、年間十万人を超す観光客で賑わっています。

現在の児童生徒の数は、小学生は十六名、中学生は九名です。平成十五年度から、小規模特認校制度による区域外通学が認められ、島外から各六名の小・中学生が毎日、西尾市渡船で通学しています。

佐久島小・中学校の特色は、少人数だからこそ、一人一人がより多くの活躍の場をもち、誰もが主役となつて力を発揮できることです。また、佐久島の伝統である佐久島太鼓を継承するために、日々練習に励み、様々な行事で披露させていただいています。和太鼓の演奏は、先輩から後輩へ、中学生から小学生へと着実に受け継がれています。

さて、今年度の七月に、地域、保護者から、小中一貫教育を目指す義務教育学校の設立を要望する二百四十五人分の陳情署名が市に提出されました。そして、十二月の市議会でも「佐久島しおさい学校」を新設する承認をいただきました。今春の四月一日の開校に向け、九年間を見通した教育課程の編成をはじめ、地域学校協働型の学校づくりに邁進しています。

(文責・和田 保彦)

支部トピックス



みよし支部

「笑顔あふれるまちづくり」

地域ぐるみの人権教育の取組

三好丘中・三好丘小・黒笹小学校

三好丘中学校区は、平成二年に三好丘小学校が、平成十八年に三好丘中学校、十九年に黒笹小学校が開校しました。県内外からの転入者をはじめ海外からの帰国者、外国からの移住者も多い活気あふれる地域です。

平成二十八年度から三年間、文部科学省より「人権教育総合推進地域事業」の指定を受けました。テーマは、「自他を認め、一人一人を大切にする心を育む地域づくり」ですが、地域の方にも分かりやすいスローガン「笑顔あふれるまちづくり」を掲げ、すべての取組を、学校・家庭・地域が一体となつて進めてきました。主な手だてとして、各校のこれまでの取組を活かしながら三校合同で「人間関係づくり研究部」「環境づくり研究部」「学習活動研究部」を立ち上げました。

小中合同で実施したあいさつ運動や部活動交流をはじめ、人権集会や学校行事・授業の様子などの写真や感想を

各校で掲示し合いました。また授業では、一人一人の学びを保障する授業づくりを目指し、人権教育の視点で身に付けさせたい資質を九年間を見通して系統化し、知識的側面、価値・態度的側面から人権に触れられるようにしました。少しずつ、互いを認め合い、互いに深め合うことができるようになってきました。

毎月一回、三校合同の学校新聞「スクラム」を発行し、家庭・地域へ情報を提供しました。十一月には、小・中学生と大人約六十名が集まり、「笑顔あふれる地域」をテーマに話し合いました。今後も三校合同で、地域に少しずつ笑顔が広がる取組を継続していきます。

(文責・三好丘中・花井 伸)



地域会議で意見を交換し合う小学生・中学生・保護者・公職者

英語を浴びて

世界にはばたけ形小っ子

蒲郡市立形原小学校

本校は『人を浴びて伸びる形小っ子』を合言葉にして学校づくりを進めています。植物がたくさんの太陽の光を浴びて芽を出し、葉をつけ、花を咲かせ、実を結ぶように、子どもたちは、多くの人を浴びることで大きく成長できると考えているからです。

再来年度から中学年の外国語活動、高学年の英語科が本格実施されます。これ



休み時間に英会話を楽しむ子どもたち

をチャンスとし、子どもたちにたくさん英語を浴びさせることで、将来世界で活躍できる人に成長させたいと思います。

子どもたちが英語でコミュニケーションすることの楽しさを味わえるようにするために「形小イングリッシュパスポート」をつくりました。一年生から六年生までの全校児童が常に携帯し、海外旅行をしていることを想定しながら、パスポートに載っている会話文

を参考に、休み時間にたくさんの人と英語で会話をしています。一回会話をする

と一枚シールがもらえるので、ゲーム感覚で楽しめ

ます。毎週、多くの子どもたちがパスポートをもって英

会話をしに、校長室に來ま

す。その他、毎週水曜日を

イングリッシュデーとし、

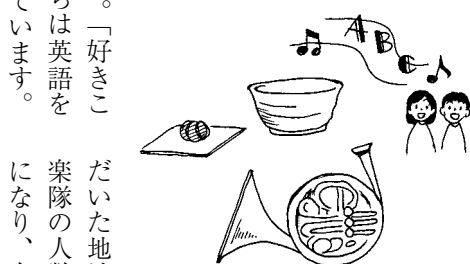
朝夕の会や休み時間、給食、

掃除など生活の中でできる

だけ英語で会話をするように

しています。また、全校

で英語の歌やゲームを楽し



学校自慢

地域との絆を深める

「共育の日」

新城市立舟着小学校

学区では、地域団体が主催する『みんな集まれ！お楽しみ会』が二十五年前から行われてきました。そして、新城市の

教育方針「共育」の趣旨を

広く地域に知らせ、学校が

積極的に地域を活性化する

役割も果たしていこうとの

考えに基づき、学校・家庭・

地域が連携し、「共に過ご

し共に学び共に育つ活動」

の大きな柱として、五年前

にお楽しみ会を学校行事に

位置付けました。

本年度は、六月九日（土）

に防犯教室・縁日ごっこ・

県警音楽隊の演奏の三部構

成で実施しました。PTA

いや竹とんぼ等のお店を回りながら、誰もが楽しそうに会話を弾ませる様子が多く見られました。高学年は、お茶席や飲み物屋、駄菓子屋の店員となって、接客体験もすることができました。

さらに、県警音楽隊の統率の取れたすばらしい演奏と、犯罪を未然に防ぐための心構えを学習できたこと等、今回のお楽しみ会も充実した内容となりました。

世代を越えて、地域の方々との交流を深め、笑顔や「ありがとう」の声があふれた共育の日。こうした地域との強い絆によって、健やかに子どもたちが成長していることが、本校一番の自慢です。

（文責・伊藤 智明）



「お茶席」で接客体験をする高学年女子児童

教室の窓から

生きる力を育む小学校英語の推進

「自分の気持ちや考えなどを
伝え合う子の育成を目指して」

岡崎市立本宿小学校

奥井 利香

自分の気持ちや考えを英語で伝えることができるようになると、会話が広がります。既習の英語を使って簡単なコミュニケーションがとれることは、新学習指導要領において重要視され、そのため伝え合う力の育成が必要になってきます。

岡崎市の小学校では、毎日約十分、市の自作DVD (OK English) を視聴しています。DVDに合わせてリピートしたり、会話をしたりします。本宿小では、低学年で体験的に「話す」「聞く」力を育て、中・高学年では、発達段階に応じて「読む」「書く」活動を加えた四技能の育成を目指した実践に取り組んでいます。

今年度、担任した四年生で工夫したことは、次の二点です。一点目は、毎朝の

既習ダイアログの会話例

A : Hello! B : Hello!
A : Nice to meet you!
B : Nice to meet you, too!
A : How are you?
B : I'm fine.
A : Do you like sushi?
B : Yes, I do. / No, I don't.
A : What food do you like?
B : I like tempura.
A : Bye. B : Bye.

DVD視聴後に一分程度、既習ダイアログで会話をする時間を設けたことです。上の会話例のような既習ダイアロ

グで会話を毎日継続することによって、子どもたちの伝え合う力を育むことができると思っています。

二点目は、英語活動の授業で、「やりとり」をする場を設けてきたことです。Canを使った授業では、can you play O O ? Yes, I can. / No, I can't. によりとりする場面を設けました。子どもたちは、友達やALT、STはもちろん参観の先生方にも積極的に話しかけていました。Yes, I can. と答えるとき、デモンストレーションで行ったa littleをリアクション付きで会話に取り入れる子どももいました。長年にわたって積み重ねてきた実践をもとにし、また、新たな指導の工夫を加えて、自分の気持ちや考えを英語で伝える本宿っ子を育てていきたいです。



先生との会話に挑戦

私のコレクション

三河湾プレーニング

高浜市教育委員会 村越 茂樹

ウィンドサーフィンとの出会いは大学時代、体育科の浜名湖で行われた夏期集中講座でした。まずはセイルアップから、不安定なボードの上では、波がほとんどない湖の上でも思うようにはいきません。ようやく引き上げて風を受けようとしても、バランスを失って

すぐに落ちることの繰り返しでした。講座修了時は、湘南の海をかつこよく走るカラオケ等の映像イメージとはほど遠く、納得のいくレベルではありませんでした。

そこから中古で道具を購入し、ひと夏かけて何とか水面を走る喜びを感じるレベルになりました。吉良町や幡豆町の海岸をグレンデにして仲間がで、風がなくても海に集うことが楽しく、教員になつてからも時間があれば海に通いました。若いころ、元日は仲間と明け方に極寒の海に出て、初日の出を拝むのが年始めの恒例行事でした。

ウィンドは、自然の風に左右され、さまざまなコンディションでプレーニング



歴代のセイルボード (学生時代の2艇を除く)

平成二十九・三十年度 実践事例集

『これからの道徳教育に向けて』

― 自他を大切にし、心豊かに生きる子の育成 ―

調査委員会

三河全域の実践を一冊に

昨年度決定した主題「これからの道徳教育に向けて」を受け、今年度、三河各地区から推薦された三十二校の先生方が実践を行いました。そして、その実践を一冊にまとめた事例集を発行しました。

この事例集は、各地区の特色あるすばらしい実践を多数まとめているので、道徳の授業を行う上で参考になると確信しています。さらに、巻頭には、愛知教育大学教授の鈴木健二先生より三河の道徳教育に対する提言をいただいています。多くの先生方がこの事例集を有効に活用されることを期待しています。

○発行

二月下旬

○執筆一覧

小学校

豊橋市立羽根井小学校 全体による報告
友達との関わりを大切にし、豊かな心を自ら高めていこうとする子どもの育成
豊川市立豊小学校 白井 全子 先生
児童の実態に合わせて、多面的・多角的な考えを引き出す授業

蒲郡市立竹島小学校 田中 宏幸 先生
共によりよく生きようとする子を育てる
新城市立千郷小学校 加藤 志保 先生
自分事として考えるための授業の展開
田原市立大草小学校 岩田 朋子 先生
自己の生き方についての考えを深められる道徳学習
設楽町立名倉小学校 杉野 文隆 先生
『特別の教科 道徳』を要とした道徳教育の充実
岡崎市立六ツ美南部小学校 本多 葵 先生
豊かな心を持ち、他者とよりよく生きる力を育てる道徳教育
碧南市立中央小学校 石原 博文 先生
豊かな道徳性を育み、よりよく生きようとする子の育成
刈谷市立小垣江東小学校 都築 洋介 先生
自他を大切にし、社会との関わりを意識する児童の育成
豊田市立広川台小学校 飯田 恭平 先生
豊田市道徳部会
友達と関わり合いながら道徳的価値について深く考える児童の育成
安城市立安城南部小学校 山元 智子 先生
仲間とよりよくかわり、他のよさを認め合う南小っ子の育成

西尾市立横須賀小学校 伊奈 紀幸 先生
夢に向かって前向きな生き方を創造し続ける子どもの育成
知立市立知立南小学校 角山 正憲 先生
自ら考え、議論することで主体的に価値観を形成する子の育成

高浜市立高取小学校 深谷 圭太 先生

道徳的価値について深く考え、自分を見つめることのできる子の育成
みよし市立三吉小学校 鈴木 晶子 先生
心ゆたかに関わり、よりよく生きる子をめざして

幸田町立坂崎小学校 鈴木 拓実 先生
思いやりの心を持ち、相手のことを考えて、進んで親切にしようとする子の育成

中学校
豊橋市立東陵中学校 鈴木実奈枝 先生
自他を尊重し、自己肯定感を高めながら、凛として生きる生徒の育成

豊川市立金屋中学校 増田 真之 先生
これからの道徳教育に向けて
蒲郡市立三谷中学校 竹尾 公孝 先生

期待の種を蒔く
新城市立鳳来中学校 二橋 由雄 先生
道徳的諸価値を見つけ、思考を深める道徳授業づくり

豊根市立立赤羽根中学校 山本 佳尚 先生
かわりを通して、主体的に判断することのできる生徒の育成

豊根市立豊根中学校 高森 彦輝 先生
根拠をもとに遵法精神について考え、自分なりに判断できる生徒の育成

岡崎市立城北中学校 米坂 達也 先生
多様な価値観を認め合い、たくましく未来を生き抜く力を育む道徳教育
碧南市立新川中学校 加藤 誠 先生
互いのよさを認め、前向きに生きようとする生徒の育成

刈谷市立雁が音中学校 栗本 拓哉 先生
モデルの生き方から自分の価値観を振り返り実生活の充実を図ることのできる生徒の育成
豊田市立足助中学校 平塚 章寛 先生
これからの道徳教育に向けて、自他を大切にし、心豊かに生きる子の育成
安城市立桜井中学校 稲川 聡 先生
相手の気持ちや立場を考えて行動する生徒の育成

西尾市立寺津中学校 磯部 昌宏 先生
『特別の教科 道徳』を要とした道徳教育の充実
知立市立知立南中学校 吉原 智美 先生

これからの道徳教育にむけて自他を大切にし、心豊かに生きる子の育成
高浜市立南中学校 杉浦 亘 先生
仲間との関わりの中で、自己を見つめ直し、現実には抱える問題に対して主体的に考えようとする生徒の育成

みよし市立南中学校 茂木 学 先生
自分や仲間の思いを大切に、人間としての生き方を考える生徒の育成

幸田町立南中学校 永田 光輝 先生
主体的に資料と向き合い、友達との関わり合いを通して、生き方を考えることができる生徒の育成

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

夏期講座

【東三河】

○期日 八月二十二日（水）

会場 豊川市役所音羽庁舎

講師

・道徳科

愛知学泉大学教授

前田 治 先生

「道徳の授業を創る」

・社会科

元豊田市立小清水小学校校長

前田 勝洋 先生

「問題解決学習である『見つけ学習』で行う社会科の授業」

受講者 五十六名

【西三河】

○期日 八月二十一日（火）

会場 岡崎市総合学習センター

講師

・理科

知立市立知立南小学校校長

福井 信也 先生

「これからの理科教育・理科授業」

・社会科

豊田市立新盛小学校長

松山 貴久 先生

「『主体的・対話的で深い学び』を実現する社会科の授業」

・道徳科

西尾市立西野町小学校校長

石川 雅春 先生

「こどもの心に届く 道徳の教室を求めて」

受講者 八十七名

本年度も魅力あふれる講師の先生方をお招きし、授業づくりに対する実践的な研究理論について学びました。授業の展開や発問を考え、受講生同士で話し合っ

た内容は、二学期からの授業で、すぐに生かすことのできるものでした。さらには、他地区の先生との交流が、教師としての力量向上への意識を高めました。



具体的な例を挙げながら
講義をする前田治先生

【受講者の声】

・道徳の授業に苦戦している中、前田先生の話を聞けてすごくよかったし、心が救われた。「待つ」「うなづく」ことの大事さだけでなく、自分自身の発想力を養う必要を感じた。
・学級経営のちょっとした気遣いを教えていただき、はっとした。「生徒の運動量のある授業」は、他の授業でも大切なことだと思う。国語の教師としても、心がけていきたい。
・単元の導入で、子どもにどれだけ切実感をもたせられるかが大事だと思った。この切実感が追究意欲、深い学びにつながると思った。社会の多様な事象に目を向け、取材に行き見識を深めたい。

授業力養成講座は、ミドルリーダーの育成のため、各校の中堅教員を対象に、授業の在り方や参観の仕方、協議会の進め方などを研修できる機会として、平成二十二年より開催しています。講座は、講師を招聘し講義形式で進める夏期講座と実際の授業を参観し授業協議会を通して授業の在り方を学ぶ秋期講座を行いました。

秋期講座

【東三河】

○期日 十月十二日（金）

会場 豊川市立東部中学校

講師

・道徳科

蔵地 孝昭 先生（三年 道徳科）

前田 治 先生

「道徳は子どもを理解するためにある」「道徳は子どもの発言の語尾が大切」「授業が流れているだけで、動いていないのはだめ」という前田治先生の言葉、蔵地先生の学級経営が本日の成果、宝です。

豊川市立小坂井西小学校

山口 昌恵 先生（五年 社会科）

前田 勝洋 先生

受講者 二十八名

【西三河】

○期日 十一月十六日（金）

会場 岡崎市立北中学校

講師

・社会科

平岩 大督 先生（三年 社会科）

松山 貴久 先生

受講者 三十七名

十一月二十七日（火）

岡崎市立竜美丘小学校

平川 愛 先生（二年 道徳科）

石川 雅春 先生

受講者 三十九名

十一月三十日（金）

岡崎市立広幡小学校

大洲 壮一朗 先生（六年 理科）

福井 信也 先生

受講者 二十七名

東三河二名、西三河三名の先生方の授業を参観しました。どの授業でも、子どもが活躍する姿が見られました。その後、あらかじめ示された参観の視点を中心に協議会を行いました。協議会では、受講者からの意見が絶えず、協議を深めることができました。最後には、授業力養成講座のまとめとして、講師の先生から具

体的なアドバイスや授業の難しさ、おもしろさなどを教えていただきました。

【受講者の声】

・「道徳は子どもを理解するためにある」「道徳は子どもの発言の語尾が大切」「授業が流れているだけで、動いていないのはだめ」という前田治先生の言葉、蔵地先生の学級経営が本日の成果、宝です。
・ペープサートやお面など、子どもが授業に引き込まれるような工夫がたくさんあって参考になった。役割演技をどのように授業に生かしていくとよいか、先生方の意見を聞いてとても考えさせられた。
・大洲先生の授業から、子どもの考えを大切にした授業展開、実験結果の考察の方法について学んだ。授業に向けて、多くの資料や教材を準備されており刺激を受けた。



授業で子どもに問い返し
をする平岩先生

部会・各種委員会

研究大会の報告

算数・数学

主体的・協働的に学ぶ

算数・数学教育の実践

平成三十年度愛知県数学教育研究会

小中学校部研究大会 安城大会

期 日 八月八日(水)

場 所 安城市民会館 他

参加者 三百八十七名

講演会 「児童・生徒の実態と算数・

数学科における深い学び」

講師 愛知教育大学教授

山田 篤史 先生

平成三十年度愛知県数学教育研究会小中学校部研究大会安城大会を、安城市民会館にて開催しました。

午前は、小中学校あわせて十二の提案を六分科会に分かれて協議しました。それぞれの分科会で、「学び合い」「関わり合い」「生活との関連」「数学的な思考力・表現力」などをキーワードに、各地域の実践が提案され、活発な協議が行われました。また、大学の先生方から、それぞれの実践に対してご助言をいただき、充実した研修の機会となりました。

午後からは、愛知教育大学の山田篤史先生より、「児童・生徒の実態と算数・

数学科における深い学び」という

演題でご講演をいただきました。

算数・数学の授業における子ども

の実態をもとに、子ども

の学びを引き出す発

問や、授業の組み立て方など、深い学び

を実現するための授業づくりのモデル

ケースが紹介されました。



深い学びについて語られる山田先生

研究大会に参加して

西尾・花ノ木小 水谷 楽

新学習指導要領に示された深い学びについて学ぼうと考え、研修会に参加しました。分科会で協議されたパズルを教材化した面積の実践や、講演で紹介された知識創造プロセスを意識した授業づくりから、実際の授業のイメージをつくることができました。深い学びを実現する授業づくりを、これからさらに追究していきたいと思えます。

へき地教育

ふるさとで心豊かに学び

新しい時代を切り拓く子どもの育成

第五十六回

愛知県へき地教育研究大会

知多地方教育研究集会

へき地教育研究部発表会

期 日 十月二十三日(火)

場 所 南知多町立篠島小学校

参加者 二百五十七名

公開授業 篠島小学校 六学級

篠島中学校 五学級

研究発表

◎篠島小学校研究主題

篠島の将来の担い手としての自覚を

もった児童の育成

「話す」「聞く」「書く」を効果的に

取り入れた伝え合う活動を通して―

◎篠島中学校研究主題

「できる」喜びを実感できる生徒の

育成

―ユニバーサルデザインの視点を取り

入れた授業と個の能力アップを目

指した取組を通して―

本年度の研究大会は、知多地方教育研究集会へき地教育研究部発表会との共催で行われました。教室からは、眼下に三河湾の雄大な風景が見渡せ、参加者からは思わず感嘆の声が出ていました。

小学校では、自分の意見を発信するとともに、他者の意見を聞き、自分の考え

を深めて発信していく

ことができる

子どもを

育てていま

した。その

ために、語

彙力や読解

力を高め、

書くことに

よって自分

の考えを整

理し、あらゆる場面で発表する機会をも

つようにしてきました。

中学校では、「できる」喜びを実感できる授業づくりを目指していました。視覚的にわかりやすい教材の提示、少人数を生かした指導、理解したことを共有化する時間の重視、既習事項を定着させる工夫等により成果を上げていました。



生活科のグループ学習

篠島の児童のたくましさに触れて

豊田・敷島小 宮川 和己

披露された「篠島魂」に、将来の担い手となる子どもたちの島への誇りを感じました。五年生社会科では、資料を読み取り、意見を傾聴し、自分の意見と照らし合わせて学びを深める様子から、「話す・聞く・書く」を軸とした研究の成果を見ることができました。

学校図書館

深い学びを創造し

豊かな心を育む 学校図書館

第五十五回愛知県学校図書館研究大会

期 日 八月二十二日（水）

場 所 安城市民会館

安城市図書館

（アンフォーレ）

全体会

記念講演「本は不思議の扉」

講師 児童文学作家

富安 陽子 氏

分科会

①⑤

読書・学習情報センターとしての

学校図書館での学び

（小学校・中学校・高等学校）

⑥⑧ ワークショップ

1 絵本のひみつ

―絵本の知と読み聞かせの心―

2 学校図書館と公共図書館の連携

から見えてきた「学びの未来」

3 絵本で遊んじゃお！

―読み聞かせの効果とコツを学ぼう―

全体会の講演会では、「やまんばのむすめ まゆのおはなし」シリーズや「オニのサラリーマン」シリーズの作者として知られる児童文学作家の富安陽子氏をお迎えしました。絵本の読み聞かせを交えながら、富安氏の温かい人柄が感じら

れる講演でし

た。参加者か

らは、「絵本

作りの裏側を

知ることがで

き、とても興

味深かった」

との声が寄せ

られました。

午後からは、二会場で八つの分科会が

行われました。①⑤の分科会では、テー

マに基づいて、小・中・高の先生方から

提案がありました。ワークショップに参

加された先生方からは、今後の活動に大

いに役立つと好評でした。



講演される富安氏

「絵本は楽しい」を伝える

安城・丈山小 河田誠一郎

絵本のワークショップに参加するま

で、読書は学習の一環だと考えていま

した。しかし、絵本と「遊び」感覚で

触れ合い、無理強いをしないことが大

切だと「花のき村」店主、伊藤さんか

ら学びました。実際に、分科会で読み

聞かせの体験を通して、聞き手がわく

わくするような本選びのこつや、子ど

もたちの心を動かすための読み方の工

夫を教わりました。本が苦手な子も、

わくわくしながら本の世界に浸り、子

どもたちの好奇心をくすぐるために、

読み聞かせを教育活動に取り入れてい

きたいです。

技術・家庭（小学校家庭科）

未来を創り出す豊かな心と

確かな実践力を育む家庭科教育

平成三十年年度

愛知県家庭科教育研究会岡崎大会

期 日 十月三十一日（水）

場 所 岡崎市立常磐小学校

参加者 三百九十四名

研究発表

◎研究主題

「豊かな心と実践力を育み、未来を

拓く家庭科教育―持続可能な社会の

構築を視点とした『消費生活・環境』

の授業作り―」

岡崎市現職研修委員会

小学校家庭科部会

指導・講評

愛知教育大学教授

青木香保里 先生

公開授業では、持続可能な社会の構築

を視点とした授業作りを目指し、五年生

では「じょうずに食材選び！ ペアの子

につくるよ おもてなしのおやつ」、六

年生では「まかせて！ 家族・地球にや

さしいこんだてづくり」の授業を公開し

ました。

研究発表では、岡崎市小学校家庭科部

会から、「自分の生活を見直し、環境に

配慮した消費者を目指して、生活をより

よくしようと工夫し、実践しようとする

子」を目指した授業作りの工夫と成果が発表されました。

指導講師の青木先生からは、現代の生活から見た持続可能な社会を目指す考え方について、具体例をもとにご指導いただきました。



授業の様子

愛家研の研究に携わって

岡崎・連尺小 高橋 崇子

研究会に向け、市の家庭科部会では

推進委員会を発足し、研鑽を積みまし

た。様々な年齢層の先生方と意見を交

換し合いました。新学習指導要領を意

識して、「消費生活と環境」の内容を家

庭科の他の内容や他教科・領域と関連

付けた題材構想を工夫し実践しました。

子どもたちが環境のことを考えて行動

できるようになった報告や授業での生

き生きた姿を見たとき、喜びとともに

に家庭科教育を充実させる大切さを改

めて感じました。

統計教育

未来に生きる力を育てる統計教育

愛知県統計教育研究発表会・講演会

期 日 十一月二十七日（火）

場 所 愛知県図書館

参加者 七十名

◎研究発表会 提案者

西 尾・一色中 齊藤 寛憲 先生

弥 富・十四山中 金中 勇樹 先生

名古屋・南陵小 奥井 祥太 先生

◎指導講評・講演会

「Society 5.0 時代の

統計教育について」

～AI時代に求められる

人材の育成を視野に～

講 師 愛知教育大学准教授

青山 和裕 先生

愛知県統計教育研究発表会・講演会が、愛知県図書館で開催されました。本年度の開催は、三河地区が担当し、県内各地より七十名の参加者を得て有意義な会となりました。

研究発表会では、尾張地区からは特別活動の実践、名古屋地区からは社会科の実践、三河地区からは数学科の実践が提案されました。身近な事象をデータ化し、生き生きと学ぶ子どもたちの姿が伝わってくる発表でした。こうした実践は、あふれる情報から必要な情報を選び、活用

する子どもの姿を目指したものです。統計教育を通して、生きる力を高めるために、学習内容をいかに具体化していくかといった提案になりました。

続いて、愛知教育大学の青山和裕先生

の講演では、AI時代において統計教育の担う役割は重要で、データを生かして問題解決

をしたり、意思決定を

したりする

ことができ

る人材を育

ていくこ

との必要性

についてこ

講演いただ

きました。



講演される青山先生

研究発表会・講演会に参加して

安城・新田小 神谷 誠

Society 5.0 時代の到来により、社会から求められる人材が変化してきています。統計教育では、データを多角的・批判的に考察することの重要性を感じました。「身近なものに目を向けて問題を見つけ出し、子どもの生活に役立てる」という視点も勉強になりました。私も教員として、子どもの目線に立って考え、物事を多角的・批判的にとらえられるようにしていきたいです。

生徒指導

自己指導能力と社会性を高める

生徒指導を目指して

平成三十年度

愛知県生徒指導研究大会

期 日 一月二十三日（水）

場 所 愛知県産業労働センター

（ウイंकあいち）

参加者 七百名

研究発表

「主體的な判断と「共生」の生き方ができる生徒の育成をめざして」

「あいさつが飛び交う学校を目指して」

「スマートフォン利用実態調査から見えるもの」

指導・講評

愛知県教育委員会

高等学校教育課 主査

林 直紀 先生

三河ブロックからは、みよし市立中部

小学校の伊藤佐織先生が、全校児童参加

型のあいさつ運動と、自主的なあいさつ

啓発組織による活動を手だてに、あいさ

つの大切さについて主體的に考え、あい

さつ運動に意欲的に参加する児童の育成

を図った実践が発表されました。

また、紙上発表として、碧南市立大浜

小学校の青木誠記先生が、「仲間とかか

わり合いな

がら、活気

ある学校づ

くりを目指

す児童の育

成」 豊橋

児童・生徒の主体性の高まり

岡崎・山中小 小島 英雄

研究大会では、小・中・高の実践が発表され、協議されました。どの発表も、児童・生徒が決められた活動をただ行うのではなく、自ら考え、自主的に活動する姿がたくさん見られました。こうした活動を支えたのは、教師が綿密に考えた手だてであり、その手だてにより、児童・生徒の主体性が高まったと感じました。また、この主体性の高まりが、個々だけでなく、学級・学年・全校に広がっていったことに、価値ある実践であったと思いました。この研究大会は、学ぶものがたくさんあり、たいへん有意義な機会となりました。



発表を受けての研究協議

教育随想 (84)

「挨拶、返事、所作（身の振る舞い方）」これらは、どの学校でも子どもたちに励行しているのではないのでしょうか。中には、挨拶を「きまり」にしている学校もあります。私は、この三つは「きまり」にすることなく、生活の心遣いとして行うものだと考えています。このことについて、全校朝会で子どもたちに話をしたことを思い出します。

「『おはようございます』は、お早うからお仕事頑張っていますね、『こんにちは』や『こんばんは』は、今日は（今晚は）寒くなりそうですから風邪などひかないようしてください、といった相手を思いやる意味を含んだ言葉です。だから、気持ちのこもった挨拶を心掛けましょう。また、皆さんの名前は、生まれた時に、家の人が願いを込めてつけた名前なので、呼ばれたら胸を張って「はい」と返事をしましょう。そして、所作は、身の振る舞い方のことです。席を立つたら椅子を入れるとか、靴を脱いだら揃えるとかをきちんとできる子は、立派な大人の人になれますよ。」かつては、家庭教育に委ねられていた

人間学の要諦



豊橋市教育委員会 教育長
山西正泰

ことかもしれません。様々な家庭がありますので、学校が身につける場であってもよいのではないかと思います。

さて、この「しつけの三原則」を説かれたのが、国民教育の師父と称される森信三先生です。森先生が大阪天王寺師範学校（現大阪教育大学）で、教職を目指す学生に講義された内容が、『修身教授録』として発刊され、現在は編集された

図書が復刊されています。私の座右の書の一冊ですが、その中に「教育の窮極」という講があります。

そこでは、教育の究極目標は、「自分の受け持っている子ら一人一人が、総て次代を担うかけがえのない生命だということ」を、単に言葉の上だけでなく、身に着けて痛感することである」と語られています。この言葉だけでも、奥深さを感じ

ますが、さらに、この講では、究極目標に到達するには、我々教師が三つの段階を通過しなければならないと続けられています。

その段階とは、「第一段階は、生徒一人一人を、一箇の生きた魂としてかき抱くということ。第二段階は、受けもった子ども一人一人が、親の身としては、かけがえのない大事なお子たちであることが、真に実感としてわかるということ。そして第三段階は、自分の目の前にいる子どもが、一人残らずやがては日本民族の一員として、それぞれの角度から国家を支えるということ」です。

私たちは、数ある職業の中から、教職を選んだわけです。『修身教授録』をまだ読んだことのない若い先生方は、一度きりの自分の人生を、教育の世界に置いたことの意義を深思するため、また、ベテランの先生方は、自分の歩んできた教職人生を深省するため、そして、人間学の要諦としても、ぜひ一度手にされることを薦めます。

最後に、森先生の言葉をもう一つ。「人生二度なし」これ人生における最大最深い真理なり。

◆平成30年度各部会・委員会刊行研究集録
保健体育 体育研究集録
技術・家庭 研究のまとめ
道徳 道徳教育研究集録

特別活動 「豊かな心を持ち、他者と共によりよく生きる子どもを育む道徳教育」
「学級づくり これだけは！」
（実践編Ⅲ）

特別支援教育 平成30年度 特別支援教育研究集録
「一人一人の教育的ニーズに応じた教育のあり方をめざして」

統計教育 愛知の統計教育 第37号
へき地教育 愛知県へき地教育 研究シリーズ42集

編集後記

ここに平成30年度の最終号をお届けいたします。平成最後の会報となります。貴重な原稿をお寄せいただき、また、「教育みかわ」をご愛読くださいました皆様、ありがとうございます。学習指導要領実施に向けた、日々の教育実践に役立つ会報誌となるよう、一層取り組んでまいります。

◆表紙の写真◆

心をひとつに
（東栄フェスティバルにて）
撮影 東栄町立東栄小学校
鈴木 美早 養護教諭

◆カット◆

愛知教育大学附属特別支援学校
神谷 宜欣 先生